コメント（2）

星名宏修

橋本恭子さんの『『華麗島文学志』とその時代』の第三章，第四章を担当します。本題に入る前に，植民地における日本人を考えるにあたって，ある映画の話から始めたいと思います。

山本薩夫の『戦争と人間』という映画です。全三部からなる長編で，登場人物の一人に，加藤剛が演じる満洲生まれの日本人二世がいます。医者である彼は満洲生まれであることをアイデンティティの核にしており，内地の日本人とは違う存在であると常々口にしています。そうしたこともあって，「良心的」な彼は周囲の中国人から信用を得ている人物として描かれています。

ところが張作霖爆殺事件が起き，中国人が「これは日本人の仕業だ」と批判するなかで，彼は思わず「日本人はそんな卑怯なことはしない。日本人なら正々堂々とやる」と反論してしまう。その時に親しくつきあっていた中国人から，「ああ，先生はやっぱり日本人なのですね」と突き放され，狼狽する姿が印象的でした。

自分は日本人ではない。満洲生まれの人間で周囲の中国人と同じ立場なのだ，と普段は公言しているのに，いざとなると日本人であることが露見してしまう。彼もまた植民地で生きる日本人のある種の典型なのでしょう。こうした人物を，橋本さんの第三章が論じる「郷土化」を考える際に，一つの補助線にしたいと思います。

橋本さんの『『華麗島文学志』とその時代』の最も重要な主張は，1930年代後半の在台日本人文学論であった島田謹二『華麗島文学志』の「外地文学論」が，40年代の台湾文学論として誤読されてきたという点にあります。それを裏づける橋本さんの論の展開は非常に説得力のあるものだと思います。

橋本さんによれば島田謹二の構想の背景には，1930年代後半特有の時代状況が存在していました。それは郷土化（土着化）と日中戦争，そして南進化の3つにまとめられます。またこの時期に在台日本人社会が土着化・成熟化することで，彼らの間に「郷土意識」や「台湾意識」が醸成されます。日本人の長期定住によって在台日本人の「湾化」が不可避となったこと。台湾生まれの二世・三世（「湾生」）の増加により，内地とは異なる郷土意識が育っていたというのです。

しかし在台日本人の「土着化」は，1930年代後半に始まるものなのでしょうか？また，そもそも「土着化」とはどのような現象を指しているのでしょうか。例えば顔杏如さんは，論文「流転的故郷之影－殖民地経験下在台日本人的故郷意識，建構與転折」（『跨域青年学者台湾史研究論集』稲郷，2008）の中で，すでに1920年代以後の時点で二世の子どもたちの「湾化」が憂慮されていたと指摘しています。

橋本さんは俳句雑誌『ゆうかり』の分析をもとに，彼らの「在台意識」を論じていますが，

ここの分析はとても興味深いものです。また西川満や島田謹二が1939年に地方主義文学を主張するなかで,「われわれ」在台日本人にとって内地の日本人は「他者」として理解されたという指摘も重要でしょう。

ところで在台日本人である「われわれ」にとって，内地の日本人は「他者」として理解されたというのが橋本さんの主張ですが，冒頭でお話しした『戦争と人間』の「良心的」な医者の姿を私は思い返さずにはいられません。在台日本人にとって内地の日本人は,本当に「他者」だったのでしょうか？

もう少し橋本さんの御著書に即して考えてみましょう。1930年代の「郷土文学論争」を経て，台湾人文学者の間でも「日本語世代」が活躍の場を広げていきます。これは彼らにとっての「郷土意識」が「台湾意識」に収斂され，そして帝国日本の一「地方」になっていく過程でもありました。この文脈のなかで，橋本さんは台湾人作家の「内地文壇志向」を1930年代に限定的な現象と考えているようですが，和泉司さんの研究によれば，40年代の『文芸台湾』グループも芥川賞を狙っていたとされています。そのことを考えると,「内地文壇志向」は30年代のみの現象とは言えないのではないでしょうか。

『『華麗島文学志』とその時代』の魅力は，フランス文学についての橋本さんの深い知見をもとに論を展開していくところにあることは，この本を読んだ誰もが納得するでしょう。プロヴァンスの文芸復興運動と在台日本人の文学とを合わせて論じている箇所は，橋本さん以外にはなしえない貴重な成果だと思います。中央文壇から自立した文学を在台日本人が構想する際に，プロヴァンス文学の反中央意識が参照され，自らもそれになぞらえて「被支配」の位置に置いたこと。プロヴァンス文学が「南方の美」を表現したことも，在台日本人の文学に踏襲されることになったと分析されます。

しかし言うまでもなく，島田謹二や西川満らは植民地台湾において支配者でした。彼らが中央文壇に対して「被支配」の位置にあると考えるのは（もちろんそのように考えるのは彼らの「自由」ではありますが），ある意味で「倒錯」と言わざるを得ないと思います。なぜなら西川らの主張する「南方の美」とは,日本の南進政策によってはじめて実現可能になったものだからです。さらにパリの「国語」ではない南仏語によって創作されたプロヴァンス文学とは異なり，在台日本人の文学は総督府によって権威づけられた「国語」から離れることはできませんでした。たとえ西川満が台湾の歴史や民俗からヒントを得，台湾語のルビによって被殖民者の発話を自らのテクストに盛り込んだとしても，彼の文学はあくまで日本の「国語」によって創作されたものであり，その意味では中央文壇の作品群と同質のものだからです。

私には，西川ら在台日本人の姿が『戦争と人間』の加藤剛が演じた満洲生まれの日本人二世とどこかで繋がっているように思えます。総督府の力，つまりは帝国日本の軍事力によって可能になった植民者としてのポジションを括弧に入れることによって，自らが内地の日本人とは違う「反中央」の「被差別」の地位におかれた存在であるかのように錯覚してしまう。もしも台湾においてプロヴァンスの文学運動になぞらえるものを挙げるとすれば，それは台湾人による文学運動ではないでしょうか。

話を先に進めましょう。1937年7月から40年までの2年半を,橋本さんは台湾文学史上の「空白期」「低調期」とみなし，漢文欄廃止に影響を受けない日本人がこの時期に全島的な台湾文壇

の主導権を握ったと述べていますが，この点はもう少し補足が必要でしょう。まずは黄得時が企画した『台湾新民報』「中篇小説創作集」についてです。陳淑容さんの研究が明らかにしたように，39 年 7 月に始まるこの連作企画は，従来の「空白期」像に修正をせまるものです。また徐坤泉が編集長となり,「植民地版『キング』」（陳培豊）とまで称された漢文通俗文学誌『風月報』の存在も忘れることはできません。「中篇小説創作集」を企画した黄得時を起用することで，新民報学芸欄から離れた徐坤泉は『風月報』の編集を引き継ぐことになります。同誌や後継誌『南方』は，台湾だけでなく日本占領下の上海や南洋でも読まれた通俗文芸誌ですが，これらの雑誌について,台湾で研究が進みつつあります。今後は「空白期」「低調期」というイメージが変わってくるかもしれません。少なくとも『風月報』によって，在台日本人が主導権を握った（とされる）「台湾文壇」以外に，中国語で執筆された通俗文学が存在したことを考えると橋本さんのおっしゃる「空白期」あるいは「低調期」というのは，いわゆる「新文学」に限定された話ではないのかという気がします。

また橋本さんによれば，日中戦争の勃発が在台日本人の文芸意識を変質させ，台湾島内での一体感を強めると同時に内地の文壇とも同じ国民感情で繋がっていったと言います。ここで言う「同じ国民感情」と，在台日本人の「鮮明な反中央意識」とはどのような関係にあるのでしょうか。戦争が長期化する 30 年代の後半には,台湾人の「皇民化」と並行して在台日本人が「湾化」し,「台湾意識」を抱くようになったと橋本さんは述べています。在台日本人が抱いた「台湾意識」と，戦争を契機とする内地との「同じ国民感情」とは，いったいどのような関係にあるのでしょうか。この点については第 4 章の議論とも関連しています。

続けて第 4 章「『外地文学論』形成の過程」にはいります。ここでは島田謹二の郷土主義が，日本内地で流行していた「郷土主義」とは異質であることが述べられています。その異質さとは，島田が「在台湾」性つまり郷土文芸を志向しつつも，同時に世界の普遍的な文学空間に開いていこうとしていた点にあると言います。同時期の日本で流行していた「郷土主義」とは，ナチスドイツに源流を持つもので，島田はこうした拝外主義的な郷土主義には否定的でした。そのような島田にとって,「在台湾」性を持つ郷土主義文学が，とりもなおさず植民地に生きる宗主国人の「外地文学」だったのです。それは内地から「自立」しつつ,しかし「光輝ある日本文学」でもあると言うのです。橋本さん自身「複数の矛盾する志向」と述べていますが，ここでの「自立」とは，いったいどのようなものなのでしょうか。これは第三章で論じられていた，在台日本人が内地との関係をどのように考えるのかという問題と重なってくるだろうと思います。

第六章で重点的に論じられる「郷愁」の問題も，台湾の「外地文学」の重要な要素です。台湾に住む日本人が「土着化」し，そこが新たな「ふるさと」になるからこそ「郷愁」というテーマが出てくるわけですが，このことを論じる際には世代の問題を抜きには議論できないと思います。これは朝鮮の事例になりますが，小林勝について研究をしている原佑介さんは，『Core Ethics』の第 7 号に掲載された「「チョッパリ」とオクスニ－小林勝の文学における植民者と「もう一つの」朝鮮」のなかで，植民地の 1 世と 2 世，そして 3 世の間では，そもそも郷愁のありかたが異なることを指摘しています。植民地の 1 世は，朝鮮の独立運動の生々しさを知っているけれども，2 世や 3 世にとって，朝鮮は彼らが生まれたときからすでに「日本」でした。そうした 2 世以後の植民者のメンタリティ，これは台湾の場合にも共通するのかもしれませんが，

彼らにとっての「郷愁」は，1世のそれとは大きく異なっているでしょうし，「郷土」に対するイメージも当然違ってくるはずです。そして在台日本人が台湾に対して抱く「郷愁」の文学的表現は，内地人にとって「特殊な景観」を描く「エグゾティスム」とあわせて南進ブームが追い風となったという指摘は重要なものだと思います。繰り返しになりますが，植民地で暮らす日本人が，内地からの「自立」を言い，中央からの「被差別」を口にする。しかし彼らの位置そのものが，内地・中央の軍事力によって初めて可能になったことは，決して見落とせないものだと私は考えます。